

## 大学院共通科目におけるL1/L2グループワーク談話の分析

An analysis of L1/L2 group work discourse in graduate general education courses

渡辺 文生, 山形大学

Fumio Watanabe, Yamagata University

### 1. はじめに

本研究の目的は、大学院の共通科目として設置されている課題解決型授業におけるL1/L2場面のグループワーク談話について、国際共修の観点から質的に分析すること、そして、その分析結果から大学院共通科目への対応を意識した今後の留学生支援の課題を明らかにすることである。分析対象データは、日本の文系の大学院研究科の必修科目となっている共通科目で実施された専攻横断型でL1話者（日本人学生）とL2話者（留学生）混在のグループによるグループワーク談話3グループ分である。

大学院共通科目とは、大学院研究科に所属する大学院生が専攻を超えて共通に履修する授業科目である。このような科目が設置されるようになった背景は、2019年の中央教育審議会において、大学院における教育の方向性として、高度な専門的知識と普遍的なスキル・リテラシー等を身に付けさせるため、複数の専攻を横断した共通のコア科目を設置する重要性が指摘されたことである。それを受け、現在の日本の大学院では共通科目の設置が進んでおり、カリキュラム上、日本人学生も留学生も同じ条件で履修しなければならないようになっている。これらの科目の中には情報伝達力・コミュニケーション能力・チームワーク力の養成としてグループワークを用いた課題解決型授業も含まれている。

国際共修とは、「文化的背景が多様な学生によって構成される学びのコミュニティ（正課活動及び課外活動）において、その文化的多様性を学習リソースとして捉え、メンバーが相互交流を通して学び合うこと（坂本・堀江・米澤2017）」と定義される。日本人学生にとっては、多様な言語・文化的背景を持つ人々との相互理解のために必要となる相互調整能力や異文化間コミュニケーション能力の習得が課題になる。留学生にとっても、同様に相互理解のための異文化間コミュニケーション能力の習得が必要になるが、それだけではなく、自分の専門とは異なる研究をする初対面の日本人大学院生と分野横断型のテーマについて日本語で議論し、グループワークに貢献することが要求されるということになる。そこで、日本語の運用についてどうしても不利がある留学生についてどう支援していくかということが、この研究の背景となっている。

## 2. 先行研究

国際共修の場におけるコミュニケーションで用いられる日本語は、「共通語としての日本語 (Japanese as a Lingua Franca: JLF)」と捉えられる。JLFにおける相互言語調整を分析した研究としては、清田 (2014)、Yamada (2021)、竹井ほか (2023) が挙げられる。

清田 (2014) は、大学における相互学習型活動を対象に、L1話者である日本人学生の言語的調整行動を分析し、意味・理解・話題に関わる調整にとどまらず、母語場面では見られない配慮行動や円滑化行動を含む言語的調整行動を行っていたと述べている。Yamada (2021) も、L1/L2場面におけるL1話者に焦点を当てて分析を行い、L1話者が主体のラポール形成や言語的調整行動、L2話者による討論への積極的な参加などが、JLFでのインクルーシブなコミュニケーションにつながったと述べている。竹井ほか (2023) では、3つの場面 (L1場面、L1/L2場面、L2場面) によるオンラインの課題遂行型会話を対象に、発話の構造的なタイプ、疑問表現、相手発話の繰り返しについて、L1話者・L2話者それぞれの使用傾向を分析している。その結果、L1話者によるこれらの表現使用の傾向には「はっきり・わかりやすく話そう」という「明確化」を目指した言語的調整行動のストラテジーが捉えられ、L2話者による表現使用の傾向には、L1/L2場面で疑問表現が減ったり、相手発話の繰り返しが減ることなどから、L1話者が会話の場面において言語ホストの役割を果たすことによる影響が指摘されている。

## 3. 調査の概要

調査対象として取り上げる大学院共通科目は、文系の研究科に所属する一年次生全員を対象とするもので、地域の行政・企業・NPO等で活動するゲストスピーカーを講師として招き、専攻横断型のグループによる学生参加型演習を行うことが目的となっている。授業はZoomによるリアルタイム・オンライン形式で行われる。全8回の授業のうち、第1回目 (導入・ガイダンス) と最終回 (総括・全体討議) を除いた6回の授業において、3つのテーマでそれぞれ2回ずつの授業を行う。1回目ではゲストスピーカーが講義を行い、次回までの課題を出し、そして2回目では課された課題についてそれぞれが調べてきたことをもとにグループワークを行う。グループワークの後には、それぞれのグループで話し合った結果を発表者が報告し、それに対してゲストスピーカーが講評を行う。

グループの編成は、1グループ3~4名のメンバーで構成される。研究科に属する3つのコースの学生が必ず1名以上配置され、留学生は1つのグループに複数名

が入らないよう分散して配置される。グループワークは、Zoomのブレイクアウトルームの機能を用い、30分間の時間設定で行われる。グループワークの際には、ファシリテーター・書記・タイムキーパー・発表者の役割分担を決めて行うように指導される。

本研究では、グループA、グループB、グループCの3つのグループによるグループワーク談話のうち、L2話者である留学生（CN01、CN02、CN03）がファシリテーターを務めている談話を分析データとして取り上げる。これらのL2話者の母語は中国語で、全員日本語能力試験のN1取得者である。竹井ほか（2023）では、L1話者が言語ホストの役割を果たすことによるL2話者への影響が指摘されていたが、本研究では、L2話者がファシリテーターを務める談話を取り上げることによって、いかにL2話者がグループワークの議論を進行していくのかという点にも注目する。

#### 4. グループワーク談話の分析

##### 4.1 グループA

ここではグループAのグループワーク談話について見ていく。メンバーの構成は以下の通りである。グループワークの課題は、1) パラスポーツ選手が所属する企業に還元できること、および、2) パラスポーツ選手を雇用する企業のメリット・デメリットについてそれぞれの受講者が調べてきたことをもとに、パラスポーツ選手とそれを支援する企業がWin×Winな関係を構築していくために必要なことを考えるということであった。

グループA      テーマ：パラスポーツ      実施日：2021年11月15日

メンバー	CN01	JP01	JP02	JP03
専攻	社会科学	文化論	臨床心理学	音楽文化
役割	ファシリテーター	タイムキーパー	書記	発表者

グループAのグループワークの談話展開は、JP01、JP03、CN01、JP02の順に課題に沿って調べてきたことを報告した後、討論議題について同じ順番で意見を述べ合い、最後に書記がまとめた内容について確認するという流れになっていた。彼らのグループワーク談話は、本研究の分析対象となった3つの談話のうち相互作用による調整行動が最も効果的に相互理解に関与しているグループワーク談話であったと言える。その要因としては、L2話者CN01が他のグループのL2話者よりも日本語の運用能力が高かったことだけではなく、L1話者のメンバーも

積極的に協力しあって議論を進行していく態度が発話行動にも表れていたことが挙げられる。

(1) グループA L2話者CN01によるファシリテーターとしての議論進行の様子

発話番号	話者	発話
67-3	JP03	《前略》その忍耐力とか、そういう面を。なんか評価して、こう長期的に。活躍できる環境作りが。大切なんじゃないかっていうことが。書いてあったので、それが。課題かなと思いました。すいません、デメリットをちょっと見られませんでした。
68	CN01	企業アスリートのキャリアパスを、あの作るというか。
69	JP03	あそうですねなんかその。なんて言ったらいいんだろう。うまあ、そういうことですかね。その競技が終わったからあなたの役割は終わりじゃなくて。競技が終わってからも、あなたのその人柄とかがすごくいいから。その人柄を役立てる役立てることができるとか。そういうことなのかなと思いました。
70	CN01	はい。わかりました。はい。よろしいですか？ JP02さん。
71	JP02	はい。大丈夫です。

たとえば、(1)の発話のやりとりを見ると、CN01は発話番号68で直前のJP03の報告について、その主張の確認を行っている。それは、JP03の発言内容を積極的に理解しようとしている態度を示すことになると同時に、ファシリテーターとして主体的に議論の進行を促すことにもなっている。それに対し、JP03も発話番号69で、CN01の確認に対して同意を示しつつ自分の考えの補足を行なっている。さらに、CN01は発話番号70で、JP03に対して「はい。わかりました。」と理解表示を行い、書記であるJP02に対して「はい。よろしいですか？」と書記作業の進捗状況への確認を行っている。

(2) グループA L1話者のタイムキーパーと相互支援しながらの議論進行

発話番号	話者	発話
78	CN01	はい。議論どうしますか？ あと15分。
79	JP01	そうですね、なんか、えと、グループワークの課題、としてそう。なんかパラスポーツ。えっと、あ、間違った。違う違うなんだっけ？そのあれ書いてない。なんかウィンウィンの関係を築くには何が必要かっていう多分課題が。なったので。さっきの調べてきたことを踏まえて、多分その課題解決の話を。多分前回のスライドの、んと一番最後とかに出てきたと思うんですけど、
81	CN01	あー、どのように構築していくか。
82	JP01	んんん。
83	CN01	うーん。
84	JP01	たぶん必要なことを あのアイデアとして多分発表が後からくるのかなと思うので。あとそうですね。14分で。14分じゃダメかな。10分の方がいいかもしれない。あとでちょっと。あの、し、んと、資料をまとめてもらったのとか見たいので。10分くらいで、やりましょう。
85	CN01	必要なこと企業が

86	JP01	んんん。企業そう。
87	CN01	企業ですね、社会、スポーツ、関連の企業。じゃあ何か考えた方ありますか？

(2) は、一通りメンバー全員が調べてきた課題についての報告が終わった後の発話のやりとりである。CN01が発話番号78で、討論議題への移行を示唆し、グループワークの残り時間について言及したのに対して、タイムキーパーのJP01が発話番号79で、議論すべき課題内容が書かれている資料の場所について情報提供し、何について議論していくかを明確にすることについて支援している。その後、発話番号81、および、発話番号85～87では、資料の内容に基づきCN01とJP01が確認し合いながら議論の主題を提示している。この発話のやりとりからは、ファシリテーターのCN01とタイムキーパーのJP01がそれぞれの役割を相互に支援しながらグループワークの議論を進行している様子がわかる。

上記の具体例の他にも、グループAでは、「あ、2番の方につなげて大丈夫ですか？(JP01)」など報告の仕方についての確認要求、「あ。じゃいいですか？(JP03)」「次行ってよろしいですか(CN01)」などの許可要求、「ちょっと待ってくださいね(JP02)」などの行動要求、「すいませーん(JP02)」などの関係作り等、相互理解や円滑な議論の運営を意識したやりとりが行われていた。それらのことから、L1話者とL2話者がそれぞれ主体的にラポール形成や議論の進行に参加していたグループワーク談話であると言える。

## 4.2 グループB

ここではグループBのグループワーク談話について見ていく。メンバーの構成は以下の通りである。グループワークの課題は、ジェンダー平等に関して地域社会にはどのような課題が存在するか、人々の意識と制度との両面に触れつつ考察すること、ただし、「地域」としてどこを取り上げるかは受講生に委ねるということであった。

グループB      テーマ：ジェンダー平等      実施日：2022年11月7日

メンバー	CN02	JP04	JP05
専攻	日本学	臨床心理学	音楽文化
役割	ファシリテーター	書記・発表者	タイムキーパー

グループBのグループワーク談話の展開は、課題として提示された「人々の意識」と「制度」という2つの観点のうち、まず前者について調べてきた内容を、

JP04、JP05、CN02の順で報告し、その後後者の観点に関して調べた内容の報告を行っている。このグループワーク談話は、メンバーがそれぞれ調べてきたことを報告するということが中心で、相手の発言内容をもとにした意見のやりとりはなかった。グループワークの最後に、JP04からCN02に対し、CN02による中国の「制度」に関する報告内容に関連して、今後の課題についての意見を問う発話があったが、CN02はそこまでは調べていないということで、自分の意見を述べることなく時間切れで終了という流れになっていた。

(3) グループB L2話者CN02によるファシリテーターとしての議論進行の様子<sup>1</sup>

発話番号	話者	発話
38	CN02	はい。あ、あの一、それでは、これからジェンダー平等の、制度の面からについて、お伺いしたいです。はい。まずは、あのJP04さんお願いします。
39	JP04	はい。えと一、なんか、制度。ちょっと違うかもしれないんですけど、なんか女性の方が、その賃金の払われない労働が多い状況、仕組み、になってる。《以下略》
40	CN02	あ。ありがとうございます。で次はJP05さん。
41	JP05	はい。えと、こちらの制度の方も、え一大石田町、を、大石田町で、ちょっと調べてみたんですが、《中略》そういうような制度が設けられているということ、でした。はい、以上です。
42	CN02	はい。***私も、その中国の、法制的な面からその制度について説明したいです。《以下略》

(3) は、「人々の意識」に関して調べたことの報告が一通り終わった後、「制度」の観点での報告に議題を移す場面での発話のやりとりである。このやりとりからは、ファシリテーターのL2話者CN02が議題の設定と発言者の指定を行い、L1話者は調べてきたことの報告のみを行っている様子がわかる。CN02は、発話番号40で「あ。ありがとうございます。」とJP04に対する配慮を示す関係作りの言語的調整行動を行っているが、L1話者からの配慮行動や円滑化行動を含む直接的な言語的調整行動は見られない。この非対称性は、グループBのL1話者が非協力的な態度でグループワークに臨んでいるということではなく、L2話者がファシリテーターという負担の多い役割を果たしているのに対して、日本語での余分な対応を負わせないためという間接的な配慮とも考えられる。ラポール形成や議論の進行に関して、このグループBとL1話者とL2話者が主体的に参加していたグループAとの違いについては、L2話者の日本語運用能力の差やL1話者自身のコミュニケーション・スタイル違いなどが関わっていたのではないかと推測される。

<sup>1</sup> 書き起こしにおける「\*\*\*」は、音声は不明瞭で聞き取れない部分を表す。

(4) グループB 意味交渉の回避

発話番号	話者	発話
26	CN02	《前略》あの、まずは、意識の面について。中国の出生性比について説明したいです。中国の国家统计局社会科学技術等文化産業統計局は、中国の出生性比のデータを発表しました。その出生性比とは、生まれた女の子、その百人に対して生まれた男の子の数です。国際的に認められている普通な出生性比は、103から107です。1980年代以降に、あの中国の出生性比は、上昇を続け、最高は、2004年の、121で、121.2になりました。《中略》その、データについて、中国人は、あー、男の子、好み、あのその感じが強い、あの根強いことを表しています。やっぱりみんなはあの男の子が、* * * 生まれたいです。《以下略》
27	JP04	ちょっと待ってくださいね。なんかなかなか、
28	CN02	はい。
29	JP04	画面共有をして、してみますね、いちおうなんかメモ、CN02さんのやつをなかなか全部メモれなくて全然ごめんなさい。
30	CN02	すいません。はい。
31	JP04	ぜんぜん、あの
32	CN02	はい。えっとー、そうですね。あの一あーはな、あの初めてはなあー言ったのは、男の子を、* * * です。はい、そして、あとは私言ったのは、世帯主率について、あの、女性の方がより男は女性の方より多いです。の二つの、問題について、説明しました。だからみんなは、あの、意識の面について、あのまだその男の子より、あ男の子が、あ一家長とか、生まれたいとか、その意識がまだあの残っています。はい。
33	JP04	ふんふん。
34	CN02	ありがとうございます。

次に、意味交渉の回避が観察される発話のやりとりについて見ていく。(4)では、まず発話番号26でCN02が「人々の意識」について調べてきたことの報告とそれに関する意見を述べている。報告の部分では、「出生性比」という用語を提示し、その定義と中国における「出生性比」の現状について述べているのだが、書記のJP04は、おそらく「出生性比」という用語そのものをどう漢字で書く言葉なのかも同定できず、報告の内容を理解できなかったと思われる。そのため、JP04は発話番号27、および、29で書記記録を画面共有し、CN02に内容の確認を求めている。そこで提示された書記記録における「出生性比」に関連する記述は、「男の子として生まれたい」という表現のみであった。JP04としては、意味交渉を行って、「何という用語なのか」と尋ねることもできたはずだが、そうはせず、書記記録の確認という形で間接的に意味交渉を行おうとしたと考えられる。それは、相手の日本語がよく聞き取れなかったということを直接的には示さないという配慮行動とも捉えられる。

一方、書記記録の確認を求められたCN02は、「出生性比」に関する記述が全く書かれていないのに、それを指摘していない。それは、「中国には子どもを産むなら男の子の方が望ましいという意識がある」という「出生性比」の現状から

考えた自分の意見は書かれていたからということ、そして、説明とその理解がお互いうまくいかなかったということを経験として取り上げるのを避けたからだとも推測される。以上のことから、お互いへの配慮によって間接的に言語的調整行動をとっていながら、結果的に意味交渉が回避され、相互理解につながっていないという様子が観察できる。

#### 4.3 グループC

ここではグループCのグループワーク談話について見ていく。メンバーの構成は以下の通りである。グループワークの課題は、グループBの場合と同じジェンダー平等に関する課題であった。

グループC      テーマ：ジェンダー平等      実施日：2022年11月7日

メンバー	CN03	JP06	JP07
専攻	日本学	臨床心理学	スポーツ科学
役割	ファシリテーター	タイムキーパー・発表	書記

グループCのグループワーク談話は、最初にファシリテーターであるL2話者CN03が、科学分野での女性の活躍率が低いという文部科学省の調査結果を報告し、それに対してどう考えるかと他のメンバーに対して発言要求を行う。その発言要求に伴うやりとりで端を発して、大学教員の男性比率、結婚によるキャリアへの影響、大学教員の忙しさと話題が次々に展開する。その一方で、グループワーク課題のキーワードである「意識」と「制度」については、CN03が冒頭で課題を読み上げたときに使われて以降、グループワークの残り時間が2分になるまで一度も出現せず、それらが話題となることがなかった。

#### (5) グループC L2話者CN03によるファシリテーターとしての議論進行の様子

発話番号	話者	発話
21	CN03	じゃあこれから、うん、皆様はどのような課題があつた存在するのか考えていらっしゃるんですか。うーん、まずあの、じゃ、じゃ自分から、
22	JP07	はい。
23	CN03	《前略》文部科学省の、あのその調査会、によると、なんか、全国であの女性、んーは、科学分野で、あの、んん、その活躍率は、男性の半数以下の水準、だと述べています。特になんか理系にあの、男性は女性より多いという現状です。あのこの点についてみなさんは、んー、どう考えていらっしゃるんですか？
24	JP07	うーん。
25	CN03	科学分野。
26	JP07	科学分野の活躍率ですか。

(5) は、科学分野での女性の活躍率に関する話題が取り上げられた発話のやりとりである。L2話者CN03は、発話番号21で自分が最初に調べてきたことを報告すると宣言し、発話番号23で調べてきたことについての報告はしたものの、それについての自分の考えを述べずに、他のメンバーに対して意見を要求している。強引な話題設定であると言えるが、L1話者のメンバーが協力的に従っていったため、結果的にグループワークに設定された課題との関連が希薄な議論になったと言える。

(6) グループC L2話者CN03による強引な話題転換<sup>2</sup>

発話番号	話者	発話
88	JP07	えっとー。んー、その、なんというか。やっぱ男性って、すごい女性、のことに、あのあんまり、なんかその、身体的な特性とか、を、あんまり、わかってない人が多いなって、あ戻ってきました。まそういうのをちょっと。
89	CN03	実はあの、あーキーワード、書いてもらえませんか？
90	JP07	あー。はい。
91	CN03	すいません。身体的、うんうん。
92	JP07	多いので。
93	CN03	ふんふん。
94	JP07	あの一、こういうこ、そういうのを、その思春期の時期に、あの教える必要があんのかなってというのが、
95	CN03	あー、確かに、なんか、せいべ、性別じゃない、そうですね、性別教育、
96	JP07	はい。
97	CN03	教える必要がある。あ、そうですね。まあ、ちゅう、自分はなんか小学、たしかに小学、六年生、五年生のとき、まあそうい、まあちょっと、まあうーん、なんていうか、うん。そうですね。このような、なんか性別に関するの、うーん、きょうい、教育を、あその授業を受けたことがあります。《以下略》

(6) では、まず最初に発話番号88でJP07が意見を述べようとしたところ、CN03が発話番号89で「キーワードを書いてもらえませんか」と直接的な行為要求を行っている。それに対し、書記であるJP07は、共有画面に「男性が女性の身体的特徴をわかっていないことが多い→思春期の時期に教える必要がある」と書き込みを行う。ここまでは、相互理解に向けた言語的調整行動をL2話者、L1話者双方が行っていると捉えられる。その後、CN03は発話番号95で、発話番号94のJP07のターンに割り込んで関連する小学生時代の性教育の授業という自分の体験へ話題をシフトさせている。このような話題転換は、L1話者が十分に自分の

<sup>2</sup> 発話番号88でJP07が「あ戻ってきました。」と言っているのは、通信トラブルで一時的にZoomから退出していたL1話者JP06がブレイクアウトルームに戻ってきたということを示している。

考えを発言することができないという点で、フラストレーションがたまるやりとりだったのではないかと推察される。

以上のように、グループCのグループワーク談話は、ファシリテーターであるCN03による強引な議論進行が見られた。それでも、言語的調整行動という観点では、意味交渉も多く、共同発話が見られるなど、相互理解に向けて積極的・直接的にメンバー同士が働きかけを行った談話であったと言える。

## 5. むすび

以上、大学院の共通科目として設置されている課題解決型授業におけるL1/L2場面のグループワーク談話について分析を行った。今回分析したグループワーク談話から、言語的調整行動がうまく相互理解に結びつく場合もあれば、結びつかない場合もあるということがわかったが、どのグループでも、L1話者とL2話者が相互に配慮し合って調整行動を行っているということが観察できた。

大学院の共通科目は今後も推進されていくと考えられるので、L1話者L2話者双方に対して、いかに相互理解に配慮したコミュニケーションのあり方のヒントを示していくかということが課題になる。今回のグループワーク談話の分析から得られた課題のポイントとしては、調べたことの報告の仕方の工夫、聞き手に配慮した用語の説明、議論の目標をメンバー間でしっかり共有することなどが挙げられる。

この研究は、JSPS科研費25K06341の助成を受けたものである。

## 参考文献

- 清田淳子（2014）「留学生と相互学習型活動における日本人学生の言語的調整行動と学び」『立命言語文化研究』26（3）127-150.
- 坂本利子・堀江未来・米澤由香子（2017）『多文化間共修：多様な文化背景をもつ大学生の学び合いを支援する』学文社
- 竹井光子・藤原美保・下條光明・渡辺文生（2023）「第一・第二言語話者による「共通語としての日本語」における言語調整の場面別考察」2023 AATJ Annual Spring Conference（2023年3月16日 Boston）パネル発表資料 American Association of Teachers of Japanese.
- Yamada, E. (2021) Investigating the roles of first language (L1) speakers in lingua franca communication in multicultural classrooms: a case study of Japanese as a Lingua Franca (JLF). *Journal of English as a lingua franca*, 10 (2) , 285-311.